

## 玉村竹二君の「五山文学新集」に対する授賞審査要旨

本書は、日本中世における五山禅僧の漢文学作品を編集したものであって、六巻、七千三百余頁に及ぶ巨編である。由来、五山僧の漢文学作品は、中国宋・元・明の偈頌と四六文の作風に倣ったものだから、中国文化移植の一面を示したものとして意義があるが、対象は作者周辺の事実にもとづいているので、わが中世の社会・政治・思想などを知る上の重要な史料となる。東京大学史料編纂所では、つとにこの種の作品の収集に努め、明治の末から大正にかけては上村觀光氏による「五山文学全集」の刊行もあつたが、なお諸所に蔵せられて、未刊・未調査のままに残された作品は数多く、学者はその史料を利用することの困難を嘆いていた。

玉村竹二君は少壮の頃から、この種の作品に親しみ、史料編纂所にあつて、その研究に當つたが、八年前から独力をもつて、未刊のものもとより、既刊のものも善本を得れば、これを公刊することを決意し、ここに鎌倉時代から室町時代に及ぶ二十七人の禅僧の主要作品を厳密な校訂のもとに、収録公刊することに成功した。各人には詳細で、新見に富んだ伝記と、諸本の解題と宗派図とを附している。

いま各巻の内容を紹介すれば、第一巻には相国寺の横川景三の全作品とその師曇仲道芳の文集とを集める。横川は室町中期の文学僧として令名が高く、その作品は成るに従つて自ら編録し書物とした。その書物は「小補集」以下十三種に達し、大部分は自筆原本が前田家尊経閣文庫に伝わる。かれが応仁の乱の戦禍を避けて近江に遁れ、苦難の生

活を送った事情が詳しく述べられ、当時の社会状態を示す好箇の史料とされる。

第二巻には友山士徳・希世靈彦・惟肖得巖三人の作品を集める。友山は鎌倉時代の末、二十八歳で元に渡り、在元十八年で帰朝した。その作品集「友山録」は唯一つの写本しか伝わっていない。希世は細川満元の知遇を得たが、僧界の栄達を求めず侍者で終って、反骨的な立場を貫いた。その集は「村庵藁」といい、各所に多くの写本を伝え、内容にも出入があるので、編者は諸本を精査し、全作品を載せている。惟肖は僧位において五山の最高を極めると共に、学芸においても拔群の才能を発揮し、室町初期の明朝風の文学を代表した名僧である。その作品「東海瑠華集」も異本が多く、中には本書によって初めて公にせられたものもある。

第三巻は天境靈致・竜山徳見・雪村友梅ら六人の作品を集める。このうち竜山は二十二歳で入元、貞和五年（一三四九）六十六歳で帰朝し、雪村は十八歳で入元、元徳元年（一三二九）四十歳で帰朝した。ふたりは長いかの地の生活の経験にもとづき、元朝禅林学芸の粹をわが国に伝えるのに貢献した。

第四巻は正宗竜統・中巖円月ら六人の作品を集める。正宗は禅林文芸の特色とする四六文の作法を正しく伝承した人として名高く、一面宗乗にも熱心で、禅風の作興に努めた。中巖は「自歴譜」を残しているので、編者はそれをもとにして諸史料を駆使し、紙背に徹する眼光を以て、この天稟の文学的才能に恵まれながら処世には拙かった傑僧の心理を洞察し、すぐれた伝記を著わしている。その著作集「東海一瀕集」には数部の写本があり、内容に異同があるが、編者は従来知られていなかった諸本をも搜索し、ほぼ完全な全作品の定本を作るのに成功している。

第五巻には瑞溪周鳳・天隠竜沢ら四人の作品を集める。瑞溪は五山文学史上逸することのできない人で、その日録

「臥雲日件録」は室町時代史の重要史料とされる。それはかれが足利將軍義教、義政らの信任をうけ、相国寺鹿苑院の塔主となって僧録のことを掌ったからである。その詩集、「臥雲藁」、四六文集「瑞溪疏」、紀行文「温泉行記」は、いずれも本書に収められているが、ともに天下の孤本である。天隱も壮年時代に応仁の乱に逢い、地方に難を避けたが、出身が播磨であったので、赤松氏の庇護をうけた。この人は東山時代の風潮である和泉をおびた作品を残し、日本の伝統学芸にもくわしかつた。その著作集はいろいろの形で伝わるので、編者はそれらをもとの形のまま収録して、全作品を集めている。

第六巻は秋澗道泉・鏡堂覚円・万里集九ら六名の作品を集める。秋澗は禅機に富んだ作品を残したほか、幕府の執権北条貞時に親しく、貞時に関する法語贅語の数多くを伝えている。鏡堂は北条時宗の師となった無学祖元に伴って宋から渡来し、鎌倉・京都の諸寺に居住し、遂に建仁寺に寂した中国僧である。その語録「鏡堂和尚語録」は鎌倉時代の伝来当初の禅林史の解明に役立つ所が多い。万里は相国寺に住したが、応仁の乱によって難を近江に避け、ついで美濃・尾張に遍歴し、やがて武蔵江戸の城主太田道灌の招請をうけて江戸に移った。しかし道灌の死によって失意の身となり、上野・越後を経て美濃の旧庵に帰った。その詩文集「梅花無尽蔵」は、かれが諸国の武将の庇護のもとに各地を遊歴した際の作品をのせ、当時の交通・社会状態を示す絶好の史料である。

以上は全六巻の内容の概略である。これを概観するに、編集や校訂の方法には望蜀の念の抱かれる所があるにしても、編者の多年にわたって蓄えた学殖と、万事を放擲してこの一事に打込んだ執念がなかったならば、到底この大著は完成されなかったであろう。著者の労苦を多とすると共に、史学界文学界における最近の大収穫として推賞したいと思う。